
チロと海水浴

千駄山ロッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チロと海水浴

【Nコード】

N6489F

【作者名】

千駄山ロツカ

【あらすじ】

岬の養老院で暮らす小野寺のおじいちゃんは、猫のぬいぐるみのチロを連れて、海水浴に行こうと思っていた。暑い夏の日、片っぴただけ靴を履いたおじいちゃんは、院内からの脱出を試みるのだが…。

チロはチロ

毎日暑い日が続くので、チロと海水浴に出かける事にした。

枕の脇で伸びをしているチロにさっそく尋ねてみると、すぐにも行きたいと言う。

いつからだろう？

チロの声が聞こえるようになったのは。

実は、僕はずっと長い間チロの事を、どういうわけか、ぬいぐるみだと思い込んでいた。

不思議な事だ。

こんなにも温かくて柔らかな腹をしている、れっきとしたオスの猫だというのに。

まあ、だけど、認識というものは、多分に主観的なものなのだ。

実を言えば、今でも他の人には、チロはぬいぐるみに見えるらしいのだ。

もしかしてチロはチロの都合で、ぬいぐるみに化けている必要があるのかもしれない。

人間にしたって、都合により一日中ロボットに成りきっている人を、僕は何人も知っている。

そもそもチロは死んだ女房のつけた名前だ。

いまいち僕の趣味じゃないが仕方が無い。

いまさら代えたってしょうがないじゃないか。

もはやチロはチロなのだから。

けちをつけちゃいけない。

第一、けちをつけたら恐い事になるのだ。

チロ、ちろ、血路、うわっ！

ほら、なってしまったじゃないか。

だからチロはチロでいいのだ。

チロだつて、この名前は気に入っていると云っている。

「小野寺のおじいちゃん、またぬいぐるみ相手に独り言を言ってるわ。海に行きたいんですって」

「ダメよ！ 小野寺のおじいちゃん。ついこのあいだ逃げ出して、大変なめに遭ったばかりでしょ」

看護婦A子とB美の会話が、まる聞こえなのだ。

僕は子供の時からピアノを習っていて、今でも週に一度は、ちゃんと上手くなっているのかどうか、母の前で弾かされるのだ。

最近、ほとんど練習してないのだが、母に怒られる心配はなくなった。

何故かと言うと、いつの頃からか、母の好きなジムノペティさえ弾いて聞かせると、母は喜んでくれて、子供の頃のように、モノサシで太ももを叩いたりしなくなったのだ。

このように音楽が得意な僕は、楽団の演奏なんか楽器別に、個々の音を聞き分ける事だつて出来る。

つまり耳が良いのだ。

だから先生の言葉も、看護婦さんの言葉も、はっきりと聞こえる。

「小野寺さん、徘徊癖が本格的になってきたわね」

「まあでも、珠子おばあちゃん程ではないわね」

「ほら、僕は耳がいいって、また自慢してるわよ」

「何処でピアノを弾くのかしらねえ。くすくす」

「いくら耳が良くなったって、脳まで届かなくっちゃ、困っちゃうわよね？」

「くすくすくす」

「とにかく、午後からは戸締りをしっかりしとかなくっちゃね。：

…珠子さん……ちゃんとそこに居るわね？」

女というものはどんな馬鹿でも、やたら勘がいいものだ。

いつのまにか僕の耳が良いという事を知っている。

これからは年相応に、耳が悪いふりをした方が良さそうだ。
いらぬ警戒心を持たれると、不自由な暮らしが、ますます不自由になるという事を僕は知っている。

さて、何はともあれ朝飯をさつさとすまして、チ口と出かけよう。

「はいはいなあに？ 小野寺さん……あらそうなの？ それは困ったわね。くすくす」

「でもね、小野寺のおじいちゃん、朝食はたった今、みんなで食べたばかりでしょ？」

馬鹿な！

空腹だから食事はまだか？

と尋ねたんじゃないか。

食べたばかりなら空腹な訳ないじゃないか！

——まあいいさ。

一食くらい抜いたって人間、死にはしない。
女共に、意地汚いと思われるのもしかた。
だから悔しいが、我慢しよう。

我慢が肝心なのだ。

我慢さえしていれば、そのうちには、きっと……。とにかく我慢だ。

「小野寺のおじいちゃん、我慢、我慢って言ってるわよ」
「嫌あね」

——え？ 何を我慢してるんだっけ？
何だっけ？

まあいい。

どうせ、たいした問題じゃあるまい。

ところで腹が減った。朝飯はまだか？

最近朝飯が遅い。

さっさとすまいたいこっちの身にもなって欲しいものだ。

誰だって一日の予定というものがあるのだから。

そうだ、チ口と海水浴だ。

早く行かなきゃ。

もう朝飯はいらない！

うかうかしてたら昼飯の時間になっちまう。

「いらないですって！ まったく、失礼しちゃっわ。こっちの方が、よっぱど我慢の連続なのよ。ねえ、小野寺さん、聞こえてるの？」

返事をしたら耳が良い事が分かってしまう。

黙っていよう。

女房と僕とは

珠子おばあちゃんは、旅行のパンフレットが宝物だ。

若い頃は、行きたくても行けなかったので、65歳を過ぎた頃から、此処へ来るまでの十年間に、あちこちと、三十力国は行ってきたのだという。

脇をすり抜けようとしたら、いつものように話しかけてきた。

「どうせ、長生きするつもりはなかったから、興味のある国は全部行ってやろうと思ったのよ。パリとかロンドンとかミハーが好きそうな所はあと回しよ。勿論、もう体力に自身がないから、ツアーを使ったわ。なるべく人数の少ないツアーよ。だから、10人以上のツアーには、なるべく参加しない事にしたの。もっとも旅行社の都合で、向こうへ行つてから、他のツアーと合流して、増えちゃった事は何べんもあったけどね。……そうそうあなた、小野寺さん。……よくご存知ね。——ポトラ宮へ行つた時、酸欠になっちゃってね。それでも添乗員さんと若い男の人に抱きかかえてもらって、頑張つてちゃんと上まで行つたのよ。上の方のトイレはね……」

僕の記憶力が特に良いのではない。

この、旅ババの話は、もう何十回も聞かされているのだ。

もしかして百回以上かもしれない。

話は延々と続いている。

僕は話をするつもりは更々ないのだが、好意的な笑みを浮かべて、相槌だけは打ってやる。

——そうだ。その調子だ。旅ババさん。生きるという事は、生存している喜びさえ噛み締めていればいいのだ。

それでいい。

「旅ババとはなによ！ 偉そうに！ 自分だってヌイグルミ抱いたボケジジイのくせに。いつその事、おんぶ紐で背中にくくりつけときゃいいのよ！」

まあ、怒るな怒るな。

話は今度また、暇な時にゆっくりと聞いてやる。

僕は玄関で靴を搜したのだが、片っぱしか見つからなかった。中庭へ出ると凄じ日差しだ。

本当に凄じ。

凄じ暑じ。

くらくらする。

中庭の景色がまるでゴッホの絵の中のようだ。

植物も歪んで見える。

これは蜃気楼と同じ状態なのだという事を僕は知っている。

暑じ！

こりゃたまらん。

たまらん。

たまらん。

早くバスに乗らなきゃ。

こんな暑くちゃ脳みそも煮えてしまう。

バスの中なら冷房が効いているだろう。

だから煮えずに済む。

勿論、本当に煮えるなんて思っちゃいない。

あくまでこれは比喻だ。

死にそうな程暑じと言ったって、めったに死ぬもんじゃない。

それと同じだ。

頭の中で『パナマ』が鳴っている。

僕は耳が良いので若い人の音楽も、良いものは好きだ。

このバン・ヘイレンという楽団の曲は、お気に入りなのだ。
夏向きの曲だ。

実際、プレスリーなんかよりいい。
ずっといい。

中庭の扉は開かない。鍵がかけてあるという事だ。
そうだ、詰め所の脇の裏口から出よう。

「あら、小野寺のおじいちゃん。片っぽだけ靴はいて、土足は駄目ですよ」

「この人、出かけるつもりなのよ」

珍しく先生も見える。

椅子に座ってテレビを見ながら、アイスコーヒーを飲んでいる。

この施設は、岬に建っているのを僕は知っている。

だから僕は、バスで岬巡りをした後で、チロと海水浴へ行つて、
帰りは疲れちゃうだろうから、親切な女子学生にでも頼んで、救急
車ででもいい、パトカーでもいいから送ってもらって、ちゃんと此処
へ帰ってくる予定なのだ。

「はははは抜群のプランだねえ。小野寺さん。いいねえ。岬巡り」

「先生つたら！」

「あははごめんごめん。でもね、小野寺さん、今日は猛暑の為、救
急車はてんでこ舞いだそうだよ。それに近頃の女子学生は優しくな
いんだ」

「先生、もつと真面目に話してやってください」

「そうだな。……とにかく外出は禁止。いつもと同じ。海水浴なん
てもつてのほかだ」

「そうよ。どうせ監視員に捕まっちゃうのよ」

何が、監視員に捕まるだ。まったく。

低脳女め！

仕方がない。

今日のところは諦めよう。

とにかく、プランは悪くない筈だ。

先生だって褒めてくれたじゃないか。

……しかし、どうして知ってるんだろ？

……。まあいい。

そうだ。久しぶりに女房の見舞いに行こう。

実は、女房は死んではいないのだ。

ただし、可哀相な事に、ずっと寝たきりなのだ。

僕よりもずっと、足腰の丈夫なひとだったのに。

僕は久々に自分の口から、声を出して喋った。

「チ口と海水浴へ行く予定だったんだけどね……」

「まあ、それはそれは」

と女房は、笑いながら病室に入ってきた。

そうだ。女房の足腰は、まだまだ達者なものだ。

そうしてみれば、やはり寝たきりなのは、僕の方らしい。

何故だか、さっきから、お寺の鐘が鳴りっぱなしだ。

僕は耳がいい。

聴力には自信がある。

だから、いささかうるさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6489f/>

チロと海水浴

2010年10月8日15時46分発行